

## 唯物論唯物論研究協会創立 30 周年記念パネルディスカッション報告

唯物論研究協会事務局長

佐藤 春吉 SATO, Harukichi

10月20・21日の京都で開催された全国唯研第30回大会に先立ち、同19日(金曜日)午後4時半より「キャンパスプラザ京都」第4講義室にて、「全国唯研創立30周年記念パネルディスカッション」が開催された。当日は雨のなか62名の参加者を集めて盛況であった。司会は中西委員長が努め、報告者は8名一人15分の報告時間という制約のなかではあったが、それぞれにとっての全国唯研の意義、課題についての考えが語られ、フロアからも活発な発言があり、いくつか重要な論点も浮かび上がり、企画としては成功だったと言えよう。当日のパネルディスカッションに関しては、電子ジャーナル編集委員会で、別途より詳しい報告集の編集が進められているので、ここでは、各報告の主要論点、討議の主要論点についての簡単な報告にとどめる。

中村行秀氏の報告は、唯物論研究の戦前戦後の歩みを振り返りながら、いわゆる「哲学のレーニン主義的段階」なる標語で語られたスターリン主義的な唯物論理解の問題点、「哲学の党派性」と「科学性」の予定調和的、政治権力的一体化の問題、そこからくる哲学の一面化のゆがみについて語られ、戦後もその影響が抜けなかったなかで、全国唯研はこのような影響を克服し、実践的唯物論の議論を通して、新しい唯物論理解を深めることができたことについて、詳しい資料も添えて論じた。この中で、全国唯研は政治的論争をストレートに哲学論争に反映させる悪しき傾向を払拭し、多様な意見や立場を尊重しながら哲学研究を深め合いつつ、現実の問題に立ち向かうという伝統が形成された、ことを強調された。

後藤道夫氏は、特に日本の戦後初期のいわゆる「戦後思想」において戦前への深い反省の共有のもと、マルクス主義思想と近代主義的思想との間

で広範な共通理解があったこと、そこには時代を反映して突き詰められていない諸論点の混合(自由権と社会権の関係理解、政治的民主主義と社会経済民主主義の間の関係理解、消極的自由と積極的自由の問題理解の不足、近代の実現課題と近代の克服課題の予定調和的理解)があったこと、この点は当時は強みだったが、やがて新自由主義的展開という社会状況の変化のなかでしっかりした思想的対応ができなくなる弱さを内包していたことについて論じた。当時は、時代変革の予兆感、アジアから先進的改革をといった論調、集団的主体への共感、講座派的な前近代への批判という問題意識の共有、アメリカの戦後の反動化と前近代批判との重なり、などの時代状況があったことにもふれ、そのために、自由主義思想との真剣な対決が行われず、自由民主主義のかかえる問題性についても十分な理解がなかった点を指摘した。こうして、60年代、70年代と社会変化が進行しても市民社会形成の未熟や前近代的な残存物への批判という枠組みを超えられなかった。福祉国家問題への思想的な深まりも行われなかったとして、これらの弱点をいかに克服するかを深めること、近代主義や自由主義思想に対抗する思想を鍛えることが本格的な課題となっている。しかし、全国唯研は、そのような日本の思想状況のなかにあって、他の研究分野と較べても、比較的しっかりと問題を解明する基盤を形成しつつあるのではないかと、という希望を語って、締めくくった。

佐藤和夫氏は、唯物論を批判の思想を、生活に根ざし、抑圧に抗して新しい生活を形成する下からの運動を始めることに、認めるとして、さまざまな最近の運動について触れた。そのうえで、「唯物論」や「社会主義」のなかで、人びとが自発的に共同して作る運動、活動的なものについてはそ

れに鈍感であったり抑圧的であったり、弾圧したりする傾向がなぜ発生するのか、この問題を真剣に考え、克服すべきだと問題提起された。集団主義を協調することにも問題があるのではないか、また権力に対抗するために権力を志向するような運動では結局、自発的な活動的運動を模索する人びととの連帯を毀損するのではないか、近代を超える方向は、このような人びとの運動のなかにあるのではないか、また、他者の受容の思想を深めるべきではないかとして、今後の思想発展の方向性について語った。

牧野広義氏は、全国唯研のなかで交わされた論争のなかでも重要な実践的唯物論論争について、マルクスの古典、戦前、戦後の論争の経過、について紹介しつつ、実践的唯物論の問題提起が唯研に集う人びとの思想の発展にさまざまに寄与したことについて語った。また、関連する論争として自由論をめぐる論争や反映論をめぐる論争にも触れ、それらについての議論が、実践論と認識論を関係づけるその後のさまざまな研究成果を生んだ経過について語った。また、現実の問題から発する実践的な問題と関わらせて哲学研究を進める唯物論の考え方の重要性について語った。

尾関周二氏は、創立以来 30 年のなかで生じた社会変化とそれに対応して現実が突きつける問題に機敏に対応してきた唯研の歴史を振り返りながら、特に、自らがかわった、資本主義の病理としての環境破壊、コミュにケーション障害の二つの問題に関連させて、啓蒙主義的なソ連型マルクス主義を克服して自前の唯物論を発展させてきた努力について語った。唯研はマルクス思想を革新することに寄与した。また、近代批判と脱近代へと重心を移動させてきたが、その背後には実践的唯物論論争を踏まえ、生活過程の批判と実践概念の豊富化のなかでのコミュニケーション論の展開があることについて触れ、今後の課題として市場規制、農業、科学技術の問題についていっそう思想的に深めることや市民社会論とコモンズ論の統合による共生持続型社会のあり方の検討が必要ではないかと語った。

浅野富美枝氏は、唯物論やマルクス主義の思想のなかにはフェミニズムや家族や性をめぐる抑圧などの問題はうまく位置づけられない傾向が続いてきたこと、マルクス主義的な婦人論も労働の問題に重点を置き、フェミニズムの提起する問題に鈍感であったことなどについて触れたうえで、しかし、そうした伝統的な視野の狭さを全国唯研が次第に克服し、当たり前位置づける状況になってきた経過について語った。そのなかで、1987 年当時の『思想と現代』の性と欲望についての特集への反応などのエピソードにも言及しながら、その後いかに問題の受けとめ方が変わってきたかについて述べた。また、唯研がフェミニズムや性といった問題にたいしても柔軟な対応ができたことを評価するとともに、その背後には、現実の問題に果敢に取り組む姿勢、意見の相違を尊重しながら行う率直な討論の伝統があり、大きな役割を果たしたことについて触れた。とはいえ、まだ唯研のメンバーが男性中心に構成されている状況があるとして、その克服の課題も提起した。

三崎和志氏は、若い世代の視点から、唯物論とポスト・モダン思想との関連について、ハーヴェイの『ポストモダニズムの条件』(青木書店)を参照しつつ、ポスト・フォーディズム的な社会変動とのかかわりでポストモダン思想の背景と特質について論じ、相対主義的問題がありつつも、その問題提起には応答するに値するものもあるとして、ホルクハイマーの唯物論理解のなかにはその接点をさぐることができるのではないかということについて語った。特に、ホルクハイマーの形而上学的唯物論と形而上学的でない唯物論についての議論を紹介しつつ、究極の根拠をさぐるような伝統的形而上学的な傾向をもつ唯物論にたいして、時代の現実の課題の解決に立ち向かう理論研究を重視する唯物論を提唱していることに触れ、後者の方向には唯研の実践的唯物論の考え方にも近似し、またポストモダン思想の良質な側面とも接合出来る要素があるのではないかと問題提起された。

橋本直人氏は、若手世代の立場から、唯研の歴史のなかで、特に現代的テーマである同時多発テ

ロ以降の帝国主義について、ポストコロニアリズム陣営が活発に議論していることと対比しての感度の鈍さについて問題提起を行った。また、マルクス主義や唯研がこうしたコロニアリズムの問題を位置づけることにはなにか思想的その他の原因があるのかと問うた。サイドやスピバックは、マルクスやマルクス主義を文明化作用への期待を語った点を重視して、西欧中心主義的であると批判しているが、帝国主義批判において共通の接点がないわけではないし、彼らはマルクスに対して評価する論点も持っている、ポストコロニアリズムにも意識レベルの研究を中心におく傾向があり、唯物論が得意とする構造的な分析などによってこれを補うような議論は可能ではないか、と語った。

以上が8名の報告者の報告についての要約である。不正確な部分もあるかもしれないが、報告者の聞き取った内容の要点である。この後、会場では、引き続きフロアからの意見を交えて活発な議論が行われた。特に重要な論点は、第1に、資本主義批判においてどのような将来方向が考えられるのか、社会主義の現代的な形態についてその展望はあるのかという問題、第2に集団と個人の間をどのようにとらえるべきか、諸個人の自由な共同をいかに進めるか、どのような質の人間関係を形成すべきか、運動はどうあるべきかといった問題、第3に、唯物論を現実的な問題に立ち向かう実践的思想と見なすことへの共感と哲学思想として深めることとの結合、観念論思想との対話の必要性について、第4にポストコロニアリズムの問題、マルクス主義は帝国主義問題や民族問題をどのようにとらえるのか、日本が帝国主義的支配の側にいることの自覚から出発すべきこと、第5に、ポストモダンの相対主義にたいして抵抗の思想の根拠をいかに思想的に位置づけるべきか、第6に、「マルクス・レーニン主義」の克服はかなり進んだが、近代批判についてはその内容理解が論者によって相当異なっているのではないか、もっとその意味を深めて論争すべきではないか、第7

に、実践的唯物論論争の総括はまだ不十分ではないか、認識か実践かといった選択肢でとらえることはできないのではないか、といった諸点が重要な論点であったと概略整理できると思われる。ここでは紹介しきれないが、これらの問題をめぐってさまざまな意見が交わされた。しかし、それらの意見もおおむね簡単なコメントのレベルであり、この議論を契機に、今後さらに議論が深まることを期待したい。短い時間ではあったが、唯研の成果と課題について、出されるべき重要論点が出されていたし、今後深めるべき点もいくつか確認できたように思われる。もちろん、ここで議論されなかった問題もあるであろうが、全国唯研のこれまでと現在の議論状況について、短い時間の議論としては、大筋よく表現されていた。その点で、本企画は成功であったと言えよう。